九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中年期の夫婦関係満足度と原家族との関係性および機能性との関連

中村, 美穂
九州大学大学院人間環境学府

針塚, 進
中村学園大学

https://doi.org/10.15017/2228883

出版情報：九州大学心理学研究. 18, pp.29-36, 2017-03-23. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2017, Vol.18, 29-36

中年期の夫婦関係満足度と原家族との関係性および機能性との関連

中村　美穂　　九州大学大学院人間環境学府
針塚　　進　　中村学園大学

The Association between Middle-aged Couples' Marital Satisfaction and Their Original Families' Relationships and Functions

Miho Nakamura（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）
Susumu Harizuka（*Nakamura Gakuen University*）

This study focused on middle-aged couples, and considered that middle-aged couples' marital satisfaction was related with their original families' relationships and functions. Questionnaire date from 153 couples was analyzed, and then it was identified 3 factors of original families' relationships with middle-aged couples, 1）intimate and opened relationships, 2）conflictive and closed relationships, 3）negative and opposed relationships between spouses and their original families, moreover 3 factors of original families' functions with middle-aged couples, 1）intimate and sympathetic communications, 2）flexible correspondences to a change in original families, 3）free self-assertions and intercommunications in their original families. In addition, it showed that the recognition of couples to relationships and functions was different between husbands and wives, and it was possible to affect middle-aged couples' marital satisfaction. These results indicates that it was an important viewpoint of figuring out relationships and functions between middle-aged couples and their original families for understanding the development of middle-aged couples and families.

Key Words: middle-aged couples' marital satisfaction, original families, relationships, functions

Ⅰ　問題と目的

1. 中年期の夫婦と原家族

一組の男女が，婚姻関係を結ぶことによって夫婦となり，夫妻はそれぞれの原家族（出生家族）から社会的に自立し心理的に分化して新たなる家族を形成する。夫婦や家族の心理発達段階について，岡堂（1989）は，新婚期における夫婦と原家族との理想的な関係は，夫婦の親密性を守りながら，夫妻が互いの原家族との関わり（プライバシー）を妨害しないものであることを指摘した。さらに，夫婦関係における心理発達的危機について，配偶者との関係と原家族との関係の均衡性の視点から論じ，そのような夫婦間，あるいは家族間の関係性やその不均衡さが，夫婦に複雑な心理的葛藤を生じさせる一因となることを示唆した。中年期の夫婦や家族は，さまざまな危機を迎える時期であると多く指摘されており（薮垣，2009），中年期の夫婦に焦点を当て，配偶者との関係や原家族との関係について検討することは，夫婦や家族の生涯発達を捉え理解する上での重要な課題であろう。

薮垣（2009）は，未だ，中年期の夫婦を対象とした研究が少ないことを示し，その一因として，“夫婦であっても私は私でありたい”というような私事化が，夫婦や家族の問題の個別化を強めている社会的状況を挙げ，そのような状況下においては，育児期や高齢期に比べて中年期の問題が表面化しにくい可能性を指摘した。それゆえ，本研究において，中年期の夫婦を対象に，夫妻が夫婦や家族という新たなる関係を構築する際に，原家族への見方や関わり方が夫婦の関係にどのような影響を及ぼすのかについて検討することは，心理臨床的な観点からの家族臨床についての理解と援助に有効な一知見を提供するのではないかと思われる。

2. 中年期の夫婦関係と原家族との関係性および機能性との関連

近年，結婚生活や夫婦関係に対する価値観は大きく変化してきていることから，中年期の夫婦に関心を寄せる研究者が増え始めているように，中年期の夫婦特有の問題と心理発達上の重要さなどが指摘されてきている（薮垣，2009）。中年期の夫婦について，主に中年期の妻を対象とした研究（難波，2000；永久・柏木，2001 など）から，夫婦や家族の“個人化”傾向が明らかにされつつある一方，井上（2001）は，“家族の中の孤独感”に着目し，孤独感は夫妻間に質的な差異が認められること，すなわち，配偶者に対する孤独感は妻の方が高いこと，孤独感には配偶者に対する“不満足度”が強い影響を及

ぼしていることなどを示した。そして，このような夫妻の感情は，夫婦間のコミュニケーション行動による影響を受けることが推察されるが，平山・柏木（2001，2004）は，中年期の夫婦を対象に，夫婦間コミュニケーションの様態について検討している。すなわち，夫婦間のコミュニケーション態度は，“威圧”，“共感”，“依存・接近”，“無視・回避”の４次元から成ることを見出し，また，夫妻の自己評定得点を用いて配偶者へのコミュニケーション態度を夫婦間で比較した結果，ポジティブなコミュニケーション態度は妻の方が有意に高く，ネガティブなコミュニケーション態度は夫の方が高いことを示した。

他方，大西（1996）は，成人の愛着関係の視点から，夫婦関係の状態への影響について検討し，自分自身の親との間で安定的な関係を築いてきたと考えられる夫妻は，現在の配偶者との関係においても受容的で配偶者に対する思いやりなどを持ち，相互理解を促進する傾向にあるとした。その一方，自分の親との間における関係に何らかのかたちで現在もとらわれている夫妻は，配偶者に対する受容能力が低く，結婚生活における不満や感情的な依存傾向が高いことを示した。また，自分自身の親との関係を軽視する夫妻は，配偶者との距離を取り，コミュニケーションも回避的であるとした。つまり，夫妻それぞれが原家族から引き継いでいる対人関係のモデルが，現在の夫婦関係の状態へも影響を与えている可能性を示唆している。

中年期の夫妻は，これまでの夫婦や家族の在り方を見直し，新たなる夫婦や家族との関係や機能を再構築する個人と家族のライフサイクルにおける大きな転換期にある。その際，夫妻は，自分自身の原家族のみならず，配偶者の原家族との関係などについて意識的あるいは無意識的に見聞きし，そのことによって夫婦間のコミュニケーションに影響が生じることが考えられる。すなわち，夫が，妻からの情緒的なコミュニケーションを通して結婚生活に対する幸福感を強めたり，妻が，夫からの共感的なコミュニケーションを通して夫婦関係に対する満足感を高めたりする可能性があるのではないかと推察される。以上のことから，中年期の夫婦にとって，配偶者と原家族との関係の在り方，そして配偶者にとって原家族はどう機能しているのかという，配偶者と原家族との関係性および機能性は，夫婦の関係の在り方に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

3. 本研究の目的

上述してきたことから，本研究の目的は，中年期の夫婦が，配偶者と原家族との関係性および機能性をどのように認知しているかに着目し，夫妻の夫婦関係に対する満足感との関連について検討することである。また，夫婦が，中年期の心理発達的な危機を乗り越えていくとき，夫婦間の問題としてのみならず，自分自身と原家族，あるいは配偶者と原家族との家族間の問題としても捉える統合的な視点をもつことの重要性について考察し，心理臨床的観点からの中年期の夫婦や家族への理解や援助に有用な知見を提供することである。

なお，薮垣（2009）が，中年期の夫婦関係に関する研究を進める上で，家族をシステムとして捉える視点を導入することの有用性を示唆していることをふまえ，「夫妻」は夫，妻個人，「夫婦」は二者関係，あるいは家族のサブシステムとしての意味を示すこととする。

Ⅱ　方　　法

1. 予備調査

2001 年 7～9 月，40～50 代の夫婦 5 組を対象に電話あるいは面接によるインタビュー形式の予備調査を実施した。倫理的配慮としては，夫妻に，研究の主旨と調査の目的について口頭にて伝え，調査協力の同意を得た。夫妻が，①配偶者と原家族のやりとりをどのように見ているか，②配偶者の原家族について配偶者とどのように話しているか，について尋ね，自由に回答してもらった。適宜，調査者は，被調査者の回答が調査内容に沿うよう意図的に応答した。

2. 質問紙調査

1）調査対象：　中年期の夫婦 258 組。

2）調査時期：　2001 年 11～12 月。

3）手続き：　事前に，電話や手紙，電子メールで連絡し，研究の主旨と調査の目的について伝えてアンケート調査への協力を依頼した。同意が得られた夫婦へ，質問紙などを入れた封筒を直接配布あるいは郵送した。夫妻が，回答を終えた質問紙を封入し，調査者による直接回収もしくは返送してもらった。調査者は，夫妻それぞれに封筒を準備するなど，個人情報の取扱いなどには十分に配慮した。

4）質問紙の構成

①フェイス・シート

夫妻それぞれの，年齢，職業，同居家族の構成および原家族について尋ねた。

②配偶者の原家族との関係性に関する質問項目

筆者が，インタビュー形式の予備調査にもとづいて，配偶者の原家族との関係性に関する質問項目を作成し，項目内容について臨床心理学専攻の大学教員や大学院生数名と検討して修正した。また，本調査が夫婦一組を一対象とし，夫妻それぞれの夫婦や原家族の関係というプライバシーに触れる可能性を十分に考慮するため，調査協力を得た夫婦数組から質問項目の内容についての率直

な意見や助言を求めて加筆修正した。「まったくあてはまらない（1点）」,「あまりあてはまらない（2点）」,「ややあてまはる（3点）」,「とてもあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。

③配偶者の原家族との機能性に関する質問項目

西出（1993）が，家族システムの機能状態を測定する尺度として作成した“家族アセスメントインベントリー（Family Assessment Inventory，以下，FAIと略記）”を参考にして，筆者が，配偶者の原家族との機能性に関する質問項目を作成し，項目内容について上記と同様に検討して修正した。FAIは，“親密で自由な家族内交流・良好な家族内コミュニケーション（私の家ではみんなが自分の考えをはっきり口に出して言いやすい）”，“家族組織の柔軟性・構造性（私の家では，いったんこうと決めたことを変えるのは難しい）”，“家族内の秩序・ルール（家族で決めたことはみんなで守る）”，“家族に対する評価（私の家族は温かく明るい感じがする）”，“家族の凝集性（私の家族はみんなそれぞれにてんでばらばらな方である）”という5つの下位尺度（30項目）から構成されている。なお，本調査では，採用した他尺度との一貫性を考え，「まったくあてはまらない（1点）」,「あまりあてはまらない（2点）」,「ややあてまはる（3点）」,「とてもあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。

④夫婦関係に対する満足感に関する質問項目

いま現在の夫婦関係はどの程度幸せなものであるか，結婚生活はどの程度安定したものであるかを測定する，“夫婦関係満足度尺度（Quality Marriage Index；以下，QMIと略記）”（Norton，1983）について，諸井（1996）が日本語訳した質問項目6項目（Table 1）を採用した。「まったくあてはまらない（1点）」,「あまりあてはまらない（2点）」,「ややあてまはる（3点）」,「とてもあてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。

Table 1
夫婦関係満足度尺度
（Quality Marriage Index；諸井，1996）

No.	項　目
1	私たちは，申し分のない結婚生活を送っている
2	私と夫／妻の関係は，非常に安定している
3	私たちの夫婦関係は，強固である
4	夫／妻との関係によって，私は幸福である
5	私は，まるで自分と夫／妻が同じチームの一員のようであると，ほんとうに感じている
6	私は，夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると，幸福だと思う

Ⅲ　結　　果

欠損値を除外した有効回答者数は，夫婦153組であり，平均年齢（*SD*）は，夫；50.25歳（4.96），妻47.61歳（4.77）であった。同居する家族構成については，夫婦と中学生から大学生までの思春期・青年期の子による家族，79.7%，夫婦と子，さらに夫あるいは妻の原家族による家族，13.1%であり，その他，夫の単身赴任による別居など多種多様な家族生活の形態が認められた。

1. 配偶者の原家族との関係性に関する質問項目の検討

中年期の夫婦からのエピソードをもとに作成した，配偶者の原家族との関係性に関する質問項目（10項目）について因子分析（最尤法・promax回転）を行い，3因子を抽出した（Table 2）。第1因子は，「夫／妻が夫／妻の実家について話をするときはいつも，とても楽しそうな顔をしている」,「夫／妻が夫／妻の両親や兄弟と話すときはいつも，にこやかな顔をしている」などの5項目からなり，「F1：配偶者と原家族との親和的で開放的な関係」と命名した。第2因子は，「夫／妻に夫／妻の家族のことを尋ねると，なにか不機嫌そうである」,「夫／妻はあまり夫／妻の家族のことについて話したがらない」などの3項目から成り，「F2：配偶者と原家族の葛藤的で閉鎖的な関係」と命名した。第3因子は，「夫／妻は私に，夫／妻の両親や兄弟についての不満を漏らすことがある」,「夫／妻は，夫／妻の両親に対する不平不満をこぼすことがある」の2項目から成り，「F3：配偶者と原家族の否定的で対立的な関係」と命名した。なお，信頼性係数（Cronbachのα係数，以下α係数）を算出したところ，α係数は，.799，.706，.729であり，一定の内的一貫性が確認された。

2. 配偶者の原家族との機能性に関する質問項目の検討

FAIにもとづいて作成した，配偶者の原家族との機能性に関する質問項目（30項目）について因子分析（最尤法・promax回転）を行い，3因子を抽出し（Table 3），西出（1993）とは異なる因子構造が得られた。西出（1993）は，親子の自分の家族の機能状態を捉えたが，本調査においては，夫妻の配偶者の原家族との機能状態に対する認知を捉えたためであると考えられた。第1因子は，「夫／妻と夫／妻の家族の気持ちはよく合っているようだ」,「夫／妻の家族は，夫／妻の気持ちをよく理解してくれていると思う」などの10項目，第2因子は，「夫／妻の家の中では，いったん家族の者それぞれが果たすべき役割が決まると，後でそれを変えるのは難しいようだ」,「夫／妻の家では，いったんこうと決めたことを変えるのは難しいようだ」などの3項目，第3因子は，「夫／妻の家族は，それぞれが自分の言い分をあまり口

に出さないように思う」,「夫／妻の家族は，夫／妻の気持ちをよく理解してくれていると思う」の２項目から構成された。各因子を,「f1：原家族との親密で共感的な意思疎通」,「f2：原家族内の変化への対応の柔軟性」,「f3：原家族の自由な自己主張と相互交流」と命名した。なお，α係数は，.920，.690，.670であり，一定の内的一貫性が確認された。

Table 2
配偶者と原家族との関係性に関する質問項目の因子分析結果と記述統計量

No.	項　目	因子負荷量 1	因子負荷量 2	因子負荷量 3	*Mean*	*SD*
	F1：「配偶者と原家族との親和的で開放的な関係」因子					
1	夫／妻が夫／妻の実家について話をするときはいつも，とても楽しそうな顔をしている	**.77**	−.01	.01	2.67	0.91
7	夫／妻が夫／妻の両親や兄弟と話すときはいつも，にこやかな顔をしている	**.75**	−.04	−.30	2.75	0.96
2	夫／妻は,「あの時，父親と母親が･･･」とうれしそうに昔の思い出話をすることが多い	**.63**	−.05	.11	2.34	0.94
4	夫／妻が夫／妻の両親や兄弟のことについて話すことは，楽しかったことやうれしかったことばかりである	**.62**	.16	−.12	2.16	0.87
10	実家からの電話にでる夫／妻は，いつも楽しそうである	**.54**	−.13	−.00	2.51	1.07
	F2：「配偶者と原家族の葛藤的で閉鎖的な関係」因子					
6	夫／妻に夫／妻の家族のことを尋ねると，なにか不機嫌そうである	.08	**.82**	.05	1.51	0.78
5	夫／妻はあまり夫／妻の家族のことについて話したがらない	−.06	**.60**	−.04	1.78	0.93
8	夫／妻は，夫／妻の両親や兄弟から電話がかかってきてもあまり話したがらない	−.03	**.56**	.05	1.48	0.80
	F3：「配偶者と原家族の否定的で対立的な関係」因子					
3	夫／妻は私に，夫／妻の両親や兄弟についての不満を漏らすことがある	.01	−.06	**1.02**	2.03	.99
9	夫／妻は，夫／妻の両親に対する不平不満をこぼすことがある	−.04	.20	**.52**	1.78	.91

因子間相関	F1	F2	F3
F1	—	−.55	−.18
F2		—	.29
F3			—

Table 3
配偶者と原家族との機能性に関する質問項目の因子分析結果と記述統計量

No.	項　目	因子負荷量 1	因子負荷量 2	因子負荷量 3	*Mean*	*SD*
	f1：「原家族との親密で共感的な意思疎通」因子					
20	夫／妻と夫／妻の家族の気持ちはよく合っているようだ	**.87**	−.08	−.15	2.89	0.92
29	夫／妻の家族は，夫／妻の気持ちをよく理解してくれていると思う	**.82**	−.01	−.10	3.01	0.90
19	夫／妻の家庭は，夫／妻が心のよりどころにできる場所であるようだ	**.80**	−.02	−.06	2.78	0.95
30	夫／妻の家族の者は夫／妻の苦労をわかっていて，夫／妻を励ましてくれるように思う	**.73**	.03	−.04	2.95	0.94
15	夫／妻の家族は，お互いにとてもうまくいっていると思う	**.71**	−.11	−.00	2.96	0.90
25	夫／妻の家族は，お互いに十分に関心を持って接しているように思う	**.68**	.11	.13	2.78	0.96
4	夫／妻の家族は，温かく明るい感じがする	**.67**	−.10	.00	2.94	0.94
9	夫／妻の家族は，夫／妻が望む雰囲気をほぼいつも備えているように思う	**.66**	.07	.07	2.41	0.97
10	夫／妻の家族には，連帯感がある	**62**	.11	.18	2.82	0.99
11	夫／妻の家族は，家の中では何でも話ができているようだ	**.59**	−.02	.26	2.72	0.95
	f2：「原家族内の変化への対応の柔軟性」因子					
7	夫／妻の家の中では，いったん家族の者それぞれが果たすべき役割が決まると，後でそれを変えるのは難しいようだ	−.08	**.76**	.11	2.11	0.91
17	夫／妻の家では，いったんこうと決めたことを変えるのは難しいようだ	.07	**.71**	−.06	2.21	0.90
22	夫／妻の家では，誰か一人が，ほとんどのことを決めているように思う	.05	**.46**	−.31	2.19	0.97
	f3：「原家族の自由な自己主張と相互交流」因子					
21	夫／妻の家族は，それぞれが自分の言い分をあまり口に出さないように思う	−.09	−.08	**.73**	2.15	0.95
1	夫／妻の家では，みんなが自分の考えをはっきりと口に出して言いやすいようだ	.17	.04	**.62**	2.76	1.02

因子間相関	f1	f2	f3
f1	—	−.40	.51
f2		—	−.26
f3			—

※太字のNo.は逆転項目を示す

3. 夫妻の夫婦関係に対する満足感に関する検討

夫婦関係に対する満足感について，夫婦間において比較するため t 検定を行ったところ，妻に比べて夫の方が，夫婦関係に対する満足感が有意に高いことが示された（$t_{(304)}=2.409$，$p<.05$）。

4. 配偶者の原家族との関係性および機能性と夫婦関係に対する満足感の関連

夫から見た妻の，妻から見た夫の，配偶者の原家族との関係性に関する因子，「F1：配偶者と原家族との親和的で開放的な関係」，「F2：配偶者と原家族の葛藤的で閉鎖的な関係」，「F3：配偶者と原家族の否定的で対立的な関係」の，夫妻それぞれの各因子得点にもとづき，33―66％タイルを基準に3群（低群・中群・高群）に分け，夫婦関係に対する満足感（QMI得点）について，配偶者の原家族との関係性に対する認知による1要因の分散分析を行った結果，有意な差が示された（Table 4，5）。Turky法による多重比較を行ったところ，夫から見た妻の，「F2：配偶者と原家族の葛藤的で閉鎖的な関係」（$F(2,150)=5.552$, $p<.01$）の低群と中・高群との間に有意な差が示された（$p<.05$）。すなわち，夫は，妻が原家族に対して葛藤を抱えるような閉鎖的な関係にあると認知するほど，夫婦関係に対する満足感は有意に低いことが明らかになった。その一方，妻から見た，夫と原家族の関係性と夫婦関係に対する満足感の間には有意な差が示されなかった。

また，夫から見た妻の，妻から見た夫の，配偶者の原家族との機能性に関する因子，「f1：原家族との親密で共感的な意思疎通」，「f2：原家族内の変化への対応の柔軟性」，「f3：原家族の自由な自己主張と相互交流」の，夫妻それぞれの各因子得点にもとづき，33―66％タイルを基準に3群（低群・中群・高群）に分け，夫婦関係に対する満足感（QMI得点）について，配偶者の原家族との機能性に対する認知による1要因の分散分析を行った結果，有意な差が示された（Table 4，5）。Turky法による多重比較を行ったところ，夫から見た妻の，「f3：原家族の自由な自己主張と相互交流」（$F(2,150)=4.026$, $p<.05$）の低群と高群の間に有意な差が示された（$p<.05$）。すなわち，夫は，妻が原家族と自由に自己主張し合いコミュニケーションを図ることができると認知

Table 4
夫から見た妻と原家族との関係性および機能性と夫婦関係に対する満足感との関連

説明変数／基準変数	夫婦関係に対する満足感（QMI得点）							
	低群		中群		高群		F 値	多重比較
夫（N=153）	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*		
F1 妻の原家族との親和的で開放的な関係	3.22	.761	3.12	.823	3.29	.732	.646	*n*
F2 妻の原家族との葛藤的で閉鎖的な関係	3.42	.639	3.07	.795	2.97	.893	5.522**	低＞中, 高
F3 妻の原家族との否定的で対立的な関係	3.26	.801	3.20	.830	3.20	.702	.123	*n*
f1：妻の原家族との親密で共感的な意思疎通	3.07	.862	3.27	.661	3.34	.733	1.868	*n*
f2：妻の原家族内の変化への対応の柔軟性	3.42	.701	3.16	.708	3.14	.817	2.146	*n*
f3：妻の原家族と自由な自己主張と相互交流	3.04	.846	.3.29	.677	3.48	.671	4.026*	低＜高

（$^{\dagger}p<.10$，$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$）

Table 5
妻から見た夫と原家族との関係性および機能性と夫婦関係に対する満足感との関連

説明変数／基準変数	夫婦関係に対する満足感（QMI得点）							
	低群		中群		高群		F 値	多重比較
妻（N=153）	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*		
F1 夫の原家族との親和的で開放的な関係	2.92	.762	3.11	.866	3.02	.754	.824	*n*
F2 夫の原家族との葛藤的で閉鎖的な関係	3.11	.751	3.14	.714	2.86	.854	2.164	*n*
F3 夫の原家族との否定的で対立的な関係	3.08	.838	2.84	.830	3.07	.678	1.271	*n*
f1：夫の原家族との親密で共感的な意思疎通	2.75	.892	3.00	.662	3.30	.695	6.780**	低＜高
f2：夫の原家族内の変化への対応の柔軟性	3.16	.763	3.06	.678	2.66	.970	4.456*	低, 中＞高
f3：夫の原家族の自由な自己主張と相互交流	2.86	.857	3.00	.684	3.21	.824	2.256	*n*

（$^{\dagger}p<.10$，$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$）

するほど，夫婦関係に対する満足感は有意に高いことが明らかになった。その一方，妻から見た夫の，「f1：原家族との親密で共感的な意思疎通」（$F(2,150)=6.780$, $p<.01$）の低群と高群（$p<.05$），「f2：原家族内の変化への対応の柔軟性」（$F(2,150)=4.456$, $p<.05$）の低群・中群と高群（$p<.05$）の間に有意な差がみられた。すなわち，妻は，夫が原家族と親しく互いに共感し合いコミュニケーションを図ることができると認知するほど，夫婦関係に対する満足感は有意に高いこと，さらに，妻は，夫が原家族に対して柔軟に変化して応じると認知するほど，夫婦関係に対する満足感が有意に低いことが明らかになった。

Ⅳ　考　　察

1. 中年期の夫婦と原家族との関係

中年期の夫婦を対象に，夫婦関係に対する満足感について検討したところ，妻に比べて夫の方が，夫婦関係における満足感が高いことが示された。菅原ら（1997）が，20歳代から60歳代の夫婦を対象とした調査において，配偶者に対して愛情を感じているかどうかと結婚年数との関連を検討し，結婚年数があがるにつれて，妻の夫へ対する愛情は減少していったが，夫の妻へ対する愛情の度合いには変化はないこと，特に，結婚15年以上の妻において，夫に対する愛情の減少率が顕著であったことを報告しており，同様の傾向がみられたと解される。近年，女性の生き方は多様化し，熟年の妻は親役割を担うと同時に，夫を含めた家族の世話をする役割が課せられ，さらには社会的役割を遂行する女性であることが少なくない。他方，夫は，その多くが家庭の外で仕事をする役割を担う者と考え，妻の役割の多様性を意識化することが難しいといえよう。このような夫妻の性役割に対する価値観の差異（柏木ら，1996）などが影響しているものと推察される。

2. 夫から見た妻の原家族との関係性および機能性と夫婦関係に対する満足感の関連

中年期の夫婦における，夫から見た妻の原家族との関係性および機能性と夫婦関係に対する満足感の関連について検討した結果，Table 4より，夫は，妻が原家族と閉鎖的な関係にあると認知するほど，夫婦関係に対する満足感が低い可能性が示された。つまり，中年期の夫は，妻が原家族との安定した信頼関係をもつことを好ましく認知し，そのような妻との関係に安心感を得ることにより，夫婦関係に対する満足感が高まるのではないかと推察された。大西（1996）が，原家族での経験が，夫妻自身の夫婦関係という親密な関係を形成していく上で，その原型を提供している可能性が高いことを示していることから，夫は，意識的あるいは無意識的に妻の原家族のなかに良好な夫婦や家族のモデルを見出し，これまでの妻との結婚生活を内省しては夫婦のあり方を見直すのではないかと考えられる。

また，夫から見た妻が，妻自身の親やきょうだいと自分の思いや考えを自由に伝えて互いに話し合えるような家族機能をもつとき，夫の夫婦関係に対する満足感は高まる可能性が示された。中高年の夫婦は，“変わらぬ夫に変化した妻”（柏木ら，1998）という図式の夫婦関係が描かれるように，妻に比べて夫は，“伝統的な性役割価値観をもっている”（柏木ら，1996）とし，夫婦関係に対する満足感を高める要因として“家庭でくつろげること”（数井，1995）を重視していることが示唆されている。つまり，夫にとって，妻が実親から十分に自立して自分の意思を自由に主張し得るような原家族との機能状態をもつことは，妻と原家族が程よい心理的距離を維持していることを意味すると推察され，夫が安定した妻との関係を認識して夫婦関係に対する満足感は高まるのではないかと考えられる。

3. 妻から見た夫の原家族との関係性および機能性と夫婦関係に対する満足感の関連

Table 5より，妻から見た夫の原家族との関係性と夫婦関係に対する満足感の関連については有意な差が示されなかった。昨今の核家族化に伴い，妻は，夫と原家族との関係を意識する機会が現実的に少なくなっていると思われる。また，藤生（1997）は，“熟年離婚”の一因として夫婦間のコミュニケーション行動を挙げていることから，妻は，夫と原家族との在り方よりも，夫との間で互いの原家族についての十分なコミュニケーションをもち得ていることを重視しているのではないかと推察される。

その一方で，妻から見た夫の原家族との機能性と夫婦関係に対する満足感との関連について，妻は，夫が原家族と親しく互いに理解し合えると認知するほど，夫婦関係に対する満足感は高まることが示された。急速な少子高齢化により，中年期の夫婦は，老年期にある親を抱えることが多く，夫婦や家族として抱える介護などの問題やその状況は複雑化していると思われる。そのため，夫妻は，それぞれの原家族に直接的あるいは間接的に関わる機会が漸増するとも考えられ，妻にとって，夫が原家族との温かい絆を感じ，親やきょうだいと共に家族ライフサイクル上の問題に対して協力し対応するような家族機能をもつことは，妻が将来的な夫婦関係に対する安心感を見出し夫婦関係に対する満足感を高めるのではないかと推察される。他方，妻から見た夫が，夫自身の原家族内の変化に柔軟に対応すると認知するほど，夫婦関係に対する満足感は低いことが示された。このことから，

妻は，夫が，夫婦を中心とする家族と原家族との間のバランスのとれた“柔軟性”（西出，1993）を重視していると考えられ，妻にとって，夫が実親やきょうだいとの問題やその状況に臨機応変に対応することは，夫の優柔不断さとして捉えられる側面をもち，夫婦関係に対する不安感を高めるのかもしれない。

Ⅴ　まとめと今後の課題

中年期の夫婦において，配偶者の原家族との関係性および機能性に対する認知は，夫妻間における差異があることや夫婦関係に対する満足感に影響を及ぼすことが示された。総じて，中年期を迎えた夫妻は，夫婦間において互いの原家族との関係や家族機能の状態についてどのように相互伝達できているかという行動的側面を重視している可能性が推察された。そのような様相から，中年期の夫婦が，これまでの夫婦の在り方を振り返るなかで意識的あるいは無意識的に自分の原家族および配偶者の原家族に夫婦のモデルを見出し，これからの夫婦関係を再構築する内的作業を遂行しているとも考えられる。ゆえに，中年期の夫婦や家族の発達について十分に理解するためには，夫婦の原家族との関係性や機能性を捉える視点は重要であろう。

また，中年期の夫婦は，家族ライフサイクル上の課題として親子の問題にも直面すると考えられることから，心理臨床の領域では，“主訴は子どもの問題としても，根底には夫婦関係のありかたが問われているものが少なくない”（平木，1998 など）とされる。そのため，心理臨床家は，中年期の夫婦や家族を，夫妻それぞれの個人ライフサイクルの視点からと同時に，家族ライフサイクルの視点から夫婦や家族の機能性や構造性について統合的に把握し検討することが，中年期の夫婦や家族への心理臨床的援助を実践する上で有用なのではないかと考えられる。

しかしながら，本研究においては，中年期の夫婦の，配偶者と原家族との関係性および機能性に対する認知と夫婦関係に対する満足感との関連について検討するにとどまった。今後の課題として，中年期の夫妻が，自分の原家族との関係性および機能性についてどう認知し，夫婦関係に対する満足感に影響を及ぼすのかなどについて検討する必要があると思われる。また，中年期の夫婦関係に関する調査研究においては，夫婦間のコミュニケーション・パターンなどの行動的側面を把握する質問項目の検討が必要であると考えられる。なお，本研究は，15 年前に行われた調査結果に基づいているため，現代の中年期の夫婦や家族の変化を十分に考慮する必要があり，新たなる調査と検討が課題である。

〈付記〉
ご助言とご指導いただいた九州大学大学院人間環境学研究院の古賀聡准教授に謝意を表します。

引 用 文 献

藪垣　将(2009)．中年期夫婦関係研究の展望―システムズ・アプローチの観点から．東京大学大学院教育学研究紀要，**49**，307-316.

藤生京子(1997.3.10)．定年後夫婦の幸福な生き方．AERA，朝日新聞社，6-9.

平木典子(編)(1988)．家族心理学講座 2　夫と妻―その親密化と破綻．金子書房.

平山順子・柏木惠子(2001)．中年期夫婦のコミュニケーション態度―夫と妻は異なるのか?．発達心理学研究，**12**，216-227.

平山順子・柏木惠子(2004)．中年期夫婦のコミュニケーション・パターン―夫婦の経済生活及び結婚観との関連．発達心理学研究，**15**，89-100.

井上清美(2001)．家族内部における孤独感と個人化傾向―中年期夫婦に対する調査データから．家族社会学研究，237-246.

柏木惠子・数井みゆき・大野祥子(1996)．結婚・家族観の変動に関する研究(1)～(3)，日本発達心理学会第 7 回大会発表論文集，240-242.

柏木惠子(編)(1998)．第 2 章　結婚・夫婦関係の心理学―その理論と実証的研究の展望　結婚・家族の心理学―家族の発達・個人の発達．ミネルヴァ書房.

数井みゆき(1995)．親役割ストレス・夫婦関係・親子関係の父母比較．家庭教育研究所紀要，**17**，73-83.

諸井克英(1996)．家族内労働の分担における衡平性の知覚．家族心理学研究，**10**(1)，15-30.

永久ひさ子・柏木惠子(2001)．中年期の母親における「個人としての生き方」への態度．発達研究，**16**，69-85.

難波淳子(2000)．中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察―語られたライフヒストリーの分析から．社会心理学研究，**15**，164-177.

西出隆紀(1993)．家族アセスメントインベントリーの作成．家族心理学研究 **7**，53-65.

Norton, R. (1983). Measuring marital quality：A critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, **45**, 141-151.

岡堂哲雄・鑪幹八郎・馬場禮子(1989)．第Ⅱ章　家族臨床心理の理論モデル　臨床心理学体系　第 4 巻　家族と社会，pp.44-82.

大西美代子(1996)．成人の愛着表象と家族関係との関連．家庭教育研究所紀要，**18**，79-90.

菅原ますみ・小泉智恵・詫摩紀子・八木下暁子・菅原健介(1997). 夫婦間の愛着関係に関する研究(1)～(3). 日本発達心理学会第８回発表論文集, pp.57-59.